

許綏「江西詩派の杜詩論」 訳注 (上)

はじめに

北宋の中期以後、杜甫は「詩聖」に祀り上げられ、杜詩は詩壇において極めて高い地位を確立した。そして、

詩を学ぶ者は、子美でなければ語らないし、武人・女子さえも皆、杜甫を余人とは違い尊敬すべきことを知っている。

(『蔡寬夫詩話』^①)

といわれるに至る。かくして杜甫を詩派の唯一の祖として、直接彼に学び、その詩法に倣う者も出てくるが、これは江西詩派が最初に提唱したことである。方回『瀛奎律髓』には、^②

古今の詩人はまさに老杜・山谷(黃庭堅)・後山(陳師道)・簡齋(陳与義)をもつて一祖三宗となす。

明らかに、黄・陳を代表とする江西詩派と、杜甫との密接な関係を窺うことができる。その意義を明の胡應麟は、^③「宋の黄・陳は、杜詩学の最初の提唱者である。」(『詩藪』内篇 卷3)と、認めた。江西詩派は、中国史上最初に宗派名を掲げた詩社であり、そこに所属した詩人も極め

許綏「江西詩派の杜詩論」 訳注(上)

加藤 国安
(漢文学研究室)

て多く、その影響力も久しきにわたった。ためにその芸術主張と創作実践は、宋代の詩風を形成する上で代表的なものとなった。江西詩派と杜甫の関係は極めて密接で、詩派の作風は杜詩の甚大な影響を受けたものである。換言すれば、杜詩は宋代の詩学に大きな影響を与えたといつてよく、それはことに江西詩派の理論と創作の中にきわめて明瞭に表れている。したがって両者の関係は、江西詩派や宋代詩学の研究、あるいは杜詩学史研究においては、一つの重要な課題となすべきものなのだ。

ところで、歴代の批評家の江西詩派の杜詩理解に対する考え方は、全く異なる。錢謙益は^④

黃庭堅の杜甫理解は、真の大切な点を知らない。これはいわゆる「前輩は飛騰しているが、余波は綺麗に墮す」(杜甫「偶題」詩 『杜詩詳注』卷18 以下の杜詩は本書の巻数を示す)で、杜詩中に調子の高い奇句・硬語を多用したのに倣い、杜甫の衣鉢を継いだと思つているが、これこそ傍門の小徑というものだ。

という。これに対し、方東樹は反対に^⑤

(『錢注杜詩』略例)

錢謙益（号、牧齋）は、黃庭堅（号、山谷）は杜甫をすっかり学んでいないと譏る。それは思うに杜詩の真髓を十分に体得していないという意のようだが、虚心に見て私は黃庭堅の杜・韓理解は甚だ深いと思う。李夢陽（号、空同）や錢謙益のように、口先や見せかけだけの笑顔で形だけまねて喜んでゐる者には分らないのだ。

と、高く評価する。（『昭味詹言』巻8）

また建国以後の江西詩派評価だが、この時期の文学批評は左傾思潮の影響を受けたことで、「思想内容が芸術形式を決定する」といった単純な公式的解釈が基準となつてしまい、実事求是の全面的な考察を欠いた状況の下で、基本的に否定的な態度がとられた。したがって、江西詩派の杜詩継承については、

ただ杜甫の格律・構造・句法や字法等々の、技巧に属するものを学んだにすぎぬ。…その上その少からぬものが、いわゆる「奪胎換骨」や「点鉄成金」からする模擬・剽窃の作品である。

（中国社会科学院編『中国文学史』第二冊 六〇三―六〇五頁）
とされることとなつたのである。なお江西詩派の後世の評価の問題については、別稿を参照してほしい（『論瀛奎律髓』与江西詩派、『學術月刊』82―6期所収）^⑤ここでは江西詩派の杜詩論と杜詩の継承、さらにはその理論と創作等について、いささか検討してみようと思う。

第一章 宋学の迷妄下における江西詩派の美学の発見

歴史が宋代に入ると、統治者側が直面したのは、空前の激烈な民族矛盾と階級矛盾だった。宋王朝は、たえず外国や強敵の侵攻を受け、国土の相当部分を失い、かつ国内的にも重大な危機を抱えていた。また農民

起義の頻発は、地主階級の専制体制に強烈なダメージを与え、さらに五代十国の大乱後、長期にわたつて続いた各々の貴族集団と大小の封建勢力との角逐もあつて、封建社会の倫理・道徳を大きく破壊するに至つたのである。

こうした歴史の下、宋の統治者は前代の滅亡の教訓を総括し、「外には譲り、必ず内を安んずるを先とす」の基本的国策を実施した。したがつて、大臣・武将の専権や農民起義こそが、王朝への主要な脅威なのであり、異民族には屈辱的な妥協をしても、農民起義は全力を上げて鎮圧し、国内の集権的専制を強化しなければならない、としたのである。と同時に、その力ずくの集権統治と対応して、思想や意識面の統治をも強化し、あわせて動乱中に甚大な破壊を受けた、封建社会の倫理・道徳を再興せんとはかつた。宋の基本的な統治上の姿勢は、「尊孔詭経」を提唱し、地主階級・知識人等を籠絡することであつた。ゆえに宋代の政治家や思想家らの儒教の經典に対する解釈は、統治者側の需要をつとめて満足させんことを期したのである。まさにエンゲルスのいう^⑥

一切の歴史上の闘争は、政治・宗教・哲学の領域中で進行するのはいうまでもなく、さらにはいかなるその他の意識形態の領域中にも進行する。実際、各社会階級の闘争を多かれ少なかれ明確に表現するものにすぎない。

である。（『マルクス・エンゲルス全集』第21巻）

このような歴史条件下に生まれてきた、程朱の道理を主体とする宋学だが、その内部には様々な学派がある。したがつて学術主張では、具体的な問題に関して鋭く対立する面もあるが、封建的教化観を運用し封建統治のために従事するという御用的性格においては、本質的に全く同一なのである。かくして理学は、その強大な影響力でもつて、社会・政治

・文化の各領域に浸透していった。宋代の杜詩研究も、この思潮の支配と影響を突出的に体现する。宋人が杜詩を論ずる際、多くは杜甫こそ儒家の詩教の正統派という視点から、統治階級への愚忠思想を、すなわち「一飯も未だかつて君を忘れず」（蘇軾「王定国詩集序」）の忠君思想を強調し、杜甫を「聖を集めて大成す」（秦觀「韓愈論」）の孔子に比し、そして杜詩を儒家の六経に比したのである。

こうして杜甫は「詩聖」に奉じられ、実質的に詩歌の領域において、孔子と同様に聖人の偶像となっていく。杜詩の重要な価値は、儒家の経学の付属性にあるということになって、その文学的価値は実質的に埋没してしまうのである。このような杜詩に対する曲解と誤解は、理学の盛行した宋の後も、一千余年にわたってひたすら杜詩論中の主要な観点となり、杜詩研究を深い学術的迷霧と頑固な思想的桎梏に陥らせることになったのである（拙論「論宋学対杜詩的曲解与誤解」参照）。

北宋中葉後、詩壇のリーダーとなった江西詩派だが、その誕生から発展に至る全過程は、もとより宋代史の中に包摂されており、宋代学術思潮の影響を自然に受けることとなった。したがって黄庭堅の杜詩論には、明らかに宋代の杜詩忠君説の時代的屈光を反映する。例えば

安知忠臣痛至骨 安んぞ忠臣の痛み 骨に至るを知らん
世上但賞瓊瑤詞 世上 但だ賞す 瓊瑤の詞を

（「磨崖碑の後に書す」）

老杜文章擅一家 老杜 一家を擅う
国風純正不欹斜 国風 純正 欹斜ならず

千古是非存史筆 千古の是非 史筆に存し
百年忠義寄江花 百年の忠義 江花に寄す

（「次韻伯氏寄贈蓋郎中喜学老杜詩」）

などという。しかし江西詩派が、多くの詩人が畢生の力を注ぎ込むほどの一大詩派になったのは、自身の大量の創作実践のみならず、前人の豊富な体験への不断の総括・研究に負う所が大きい。実際、江西詩派の詩論は詩歌自体の本質に多くの注意を払ってきたといえるし、こうしてこそ彼らの詩歌も芸術の表現法則と美的特質を有するものとなったのである。

黄庭堅の「韋僂の馬に題す」詩では

韋侯常喜作群馬 韋侯 常に喜ぶ 群馬を作すを
杜陵詩中如見画 杜陵の詩中に その画を見るが如し

一洗万古凡馬空 一たび万古の凡馬を洗いて空しうす

句法如此今誰工 句法此の如し 今 誰か工ならん

これは杜甫の詩の芸術形象が、真に迫り入神のできばえであり、句法の精工無比であることを述べたものである。さらに、陳師道は『後山詩話』の中で、

子美の詩は、奇常・工易・新陳ともに兼備していて、よくないものはない。

と指摘するが、杜詩の芸術における多方面の技巧に対する、高い評価を示したものである。こうした見解は、江西詩派の杜詩論中に頻出するが、彼らが杜詩の芸術性をいかに普遍的に重視したかが分かる。

宋代の特定の歴史的条件下で、理学が弥漫した文壇にあつて江西詩派は儒家の教化観をもって杜詩を曲解するような御用的態度には、完全には屈服しておらず、むしろ杜詩の芸術表現と美学的特徴について、貴重な探求を行っていた。そして、当時の深い迷妄の中でひとときわ輝きを放ちながら、自己の創作と理論とを融合するという、独自の活動を展開していたのである。してみると、江西詩派は、ただ芸術上の技巧のみを追

及し、また杜詩の格律や形式ばかりをひたすら学んだ、というような否定的見解は、明らかに江西詩派の置かれた時代状況を、軽視したものと見えよう。したがって宋代の杜詩学の迷霧の中で、その美学的価値を発見したという意義を、正しく評価しようという我々の解釈とは、まことに遠く隔たったものとなる。

中国古代の詩論は、もともと詩と音楽が分かれておらず、感性的なもの(「情」と意志的なもの「志し」)が一体だった。「尚書」「舜典」にも^⑧の(「情」と意志的なもの「志し」)が一体だった。「尚書」「舜典」にも

詩は志を言い、歌は言を永くし、声は永きに依り、律は声を和す。
八音克諧、倫を相奪うこと無ければ、神人以つて和す。

という。また、孔頴達の(「札記」)「経解篇・正義」でも、「詩が楽章となれば、詩と音楽とは一体となる。」と述べる。ということは、音楽は必ず詩という言葉と配され、詩もまた音楽を伴っていたわけで、結局詩と音楽とは、内容の表現においても、また内容表現を盛る形式においても、渾然一体だったといえよう。すなわち、「詩は志を言う」とは、「鐘鼓をもって志を導く」(『荀子』「楽論」)ことでもある。されば、「音楽とは、楽しむことである。人情の免れがたいものである。」(同)といわれるが、この「人情を免れがたい」とは、音楽が人間の感情に沿うという本質と、感情より生まれた音楽が、かえって人間の感情をうまく表現するという特徴があることの二つを、包含する。これは、中国の初期の詩論における詩歌本質論、及びその美学的特質論に関する重要な発見である。

しかし、やがて「詩辞と美刺(褒め貶する意)を以て諷諭し以て人を教(化)す」という「詩教」と、「声音と干戚(舞踊の意)を以て人を教(化)す」という「音教」とが、区別されるようになる。両者の内容と形式は、次第に分離していくようになる。そして、「詩は、志を言う」という一文には、「夫婦を^{おさ}経め、孝敬を成し、人倫を厚くし、教

化を美しくし、風俗を移す」(『毛詩』「国風」序)という特殊な意義が賦与され、統治階級の政治的教化に有用な社会的効用性が強調されるようになる。こうした「志」の意味するものは、自ずから「情性を吟詠し」、「情より発す」といった「情」とは、全く相容れない。

魏晋以後、儒学的統治の衰退につれて、文学が発達し、山水詩が盛んとなるが、それは、先秦兩漢の經史学者らの詩論が、詩を解くことに重点をおき、いわば詩と政教との関係を説明すべく、詩の意味を曲解するようなものとは、根本的に異なる。六朝の文人の詩論は、何よりも詩を書くことを重んじた。彼らは実際の経験を総合し、創作上の理念とするべく、詩歌それ自身の「縁情」という特徴を重視、詩はそうしてこそ真の芸術とみなしうると考えた。陸機は、「詩は情に縁りてこそ綺靡となる」(『文賦』第五節)といい、鍾嶸は、「気が物を動かし、物が人を動かす。ゆえに心が動いて歌舞となって表現されるのだ」(『詩品』序)と述べたが、詩歌創作における感情と美学の特質を、正確に把握したものである。

ところが、こうした芸術性を過度に重視しすぎたために、六朝詩壇は「彩麗、繁を競う」といった風を結果し必然的に唐代詩人の排斥を受けることとなる。唐代詩壇で、詩歌の社会的効用性を強調した「言志派」の代表は、白居易である。彼の「時政を補察し」、「人情を導泄する」(『元九に与うる書』)という表現は、例の「教化を美しくし、人倫を厚くす」の完全な翻訳語である。白居易は、これを基準にすべての作品を推し量り、その結果、屈原・李白及び杜甫のほとんどの作品を、低く評価することとなった。これは、漢の儒者の『詩経』に対する僅かな歪曲的詩論と比べれば、さらに一層の徹底化といえる。

ただし白居易は、畢竟大詩人である。彼は詩を本質的には、「感情に根ざし、言葉を枝葉とし、音声を花卉とし、内容を結実とする」(『同前』)

という「縁情」的なものと見ているが、六朝の詩人たちと同じではない。彼は、人の心を感動させるのは、自然物ではなく、詩人の社会的体験だとし、「多くは讒言・怨恨、譴責・放逐、征戍、飢餓、病老、存歿、別離等のことより、心が内部に動き、その結果文が外部に表されることになる」（『序洛詩』）という。これは六朝の縁情論をさらに充実・発展させたものといえる。こうしてみると、白居易の詩論は、儒家の政教観を主体として、それに六朝以前の「言志説」「縁情説」を融合したものであることが分かる。

しかし、儒家の政教的詩学は、宋代になると理学者らにより極端に尊崇され、いわゆる「志は、詩の本質であり、音楽はその末梢にすぎない。末が滅んでも、本の存在を害してはならない。」（『朱子文集』卷37^⑮）の「志本樂末論」が起きてくる。これは、儒家の詩教に対する一面的な継承、及び審美的芸術性への甚だしい軽視にほかならない。彼らは、封建道徳の規範を拡大して、宇宙の本源たる「天理」と見なし、物に感じて動く「情」「欲」を、その「天理」と対立させ、その結果、「感情が人間を溺れさせるのは、水よりも甚だしい」（邵雍『伊川擊壤集』序）、「文は皆な道から流出してくるのだ」（『朱子語類』卷139^⑯）と、断定した。

こうした「天理存して、人欲滅す」式の見解より発展した文化的専制思想は、實際的に封建道徳の規範により、芸術それ自体の美的価値を否定するものだった。これによって、宋人の大多数が好む杜詩も、いわゆる「聖人の心学を伝」える文となり、杜甫自身がしばしば流露した、「文章は、曹植のごとく波瀾闊く」（『高蜀州の人日に寄せらるるに追酬す』卷23）、「庾信、文章老いて更に成り」（『戯れに六絶句を為す』其一卷11）といった、芸術的な境地における自己実現の表現さえも、「所見、狭し」（『洪邁『容齋隨筆』卷16）と斥けられる。したがって、杜詩中の物に感じて抒情を述べたような詩、たとえば「花を穿つ蛺蝶は深深と

見え、水に点する蜻蜓は款款として飛ぶ」（『曲江二首』其二）のごとき閑言語は、どのような意味があるのか。（『二程遺書』卷18）と酷評されることになる。以上よりすると、儒家の政教詩学と宋代の特殊な時代とがしつかり結び付いて、宋学の杜詩曲解の理論の淵源となり、その後の杜詩理解の歩みを決定していることが分かる。

さて、この江西詩派は、理学の盛んだった宋代に起こったが、その中のある中堅作家などは、理学者のまさにその懐の中で成長した。例えば、呂本中がその良い例で、彼は大理学者呂好問の子であり、またもう一人の大理学者呂祖濟の祖父であり、文字どおり理学者の名門に生まれたといえる。しかし、貴重なことに、彼も含めて江西詩派の詩人たちは、詩歌の本質論については、理学者の対立面に立っていた。黄庭堅などは、「詩とは、人の感性を詠うものだ」（『王知載の〈胸山雜詠〉の後に書す』）と肯定的に述べ、詩の縁情性を強く回復せんとしている。すなわち、江西詩派の詩人たちは、詩歌の芸術的特徴と創作の過程を重視し、あわせてすぐれた理論的基礎を有していたといえる。

これに関して、呂本中の「東萊呂紫微詩話」には、次のような精彩に富む記述がある。^⑰

汪革がかって詩を作って、謝逸に寄せていうには、

問訊江南謝康樂	問訊す	江南の謝康樂
溪堂春木想扶疏	溪堂の春木	扶疏を想う
高談何日看揮塵	高談	何れの日にか 揮塵を看ん
安歩從來可当車	歩を安んじて	從來より 車に当たるべし
但得丹霞訪龐老	但だ 丹霞を得て	龐老を訪ねるのみ
何須狗監薦相如	何ぞ須いん	狗監の相如を薦めるを
新年更励於陵節	新年	更に於陵の節を励み
妻子同鋤五畝蔬	妻子	共に五畝の蔬を鋤くべし

と。饒節が、この詩を見て汪革にいうには、「汪公の詩は日々に進み、道からは遠くなっている。」と。けだし、大切な課題は、詩にこそあり、道にはないのだ。

ここで饒節は、汪革の詩を評して、「詩」と「道」を対立させ、あたかも「文は皆な道中より流出する」〔前出〕という道学家の詩論に對し、公開挑戦状を提出するかのようだ。〔劉克莊の記す所によれば、〕呂本中〔紫微公〕は、このような詩論を「往々：自ら道えり」〔後村先生大全集〕卷95「江西詩派―呂紫微」だったという。その上、饒節・汪革・呂本中何れも江西詩派中の人物であつてみれば、これは紛れもなく江西詩派全体の普遍的な観点と課題についての、共通認識を示すものといえる。まさに詩は先ず作られるものだという見解より、詩の芸術美の探求に意を注ごうというこの姿勢が、江西詩派の杜詩論をして、その詩中の縁情的な特徴から更に進んで、一層多く杜詩の美学的価値を豊かに発見させることになる。

謝逸の「智伯の絶句に和す 四首」其三にいう、^②

黄四娘家花有声 黄四娘の家 花に声有り

杜陵野郎最関情 杜陵の野郎 最も情に関わる

恐遭江上春風惱 遭うを恐る 江上の春風の悩ましき

豈是吟哦太瘦生 豈に是れ 吟哦せん 太瘦の生

と。物に感じ心を動かされての詩作は、杜詩中にあるはおおむねが皆そうである。〔たとえば杜甫の成都期の詩句、〕「黄四娘の家、花、溪に満ち、千朵万朵、枝を圧して低る」〔「江畔独り歩みて花を尋ぬ 七絶」其六〕などは、右の「杜陵の野郎、最も情に関わる」という発言を裏付けるものである。この見方と、道学者が〔前述のように〕「花を穿つ 蝶は深深として見え、水に点する蜻蛉は款款として飛ぶ」〔「曲江二首」其二〕のごとき詩句を、「このような閑言語は、どのような意味がある

のか。〔前出〕とそしめるのとは、鮮やかな対比を示す。さらに「花に声有り」の表現は、詩人の感性の外在化であり、また詩人を通しての対象の人格化でもある。そうすることで、この花には、多義的イメージが賦与されるのだ。

もし、この謝逸の含蓄深い認識を、西洋の近代美学者リッパス、フォルケットらの「感情移入論」と比較検討してみれば、どこか共通点があるように思われる。これはまさに芸術の客観的法則なのであり、江西詩派の貴重な発見だといえよう。彼らは杜詩の縁情的特質を肯定し、理学の影響下での杜詩の曲解を明確に否定する。黄庭堅はいう、^③

杜詩の詩句を読んで穿鑿を喜ぶものは、その大事な精髓を捨て去り、詩中の林・泉・人物・草木虫魚の「興」的手法を取り上げて、皆各々託する所があるのだとする。こうした隠語をあれこれと考えるような世間の連中は、全く子美の詩を地に捨てるようなものだ。

〔「大雅堂記」〕

この隠語の過度な穿鑿は、まさに呉見思のいう「後人の杜詩を論ずる者は、ひとたびその魅力に毒されるや、杜詩をみな詩史・忠愛の作とする」〔「杜詩論文」〕「凡例・余論」のごときものであり、さらに甚だしきは、朱熹の詩外求意説的な神秘主義、すなわち「用事造語の外にあるものは、ただ虚心に作品を諷詠することによって、初めてその何たるかを理解しうる」〔「章国華の集注せる所の杜詩に跋す」〕といった態度と同等であろう。

しかし、ここで黄庭堅のいう「林・泉・人物・草木虫魚に託された物」とは、詩人の詩魂と外界の景物との融合したもの、あるいは物の感応と人の感性との統一したものを指そう。「興」とは、このような「物に触

発されて、情が起ころ」（胡寅『斐然集』卷18「李叔易に致す」）²⁷とい
った謂いであり、中国古典詩歌の創作論の核心である。このいわば情景
の結合、物我の交融は、歴代詩人や批評家らによって詩歌創作の至高の
美学的境地とされてきたものである。

ここに、黄庭堅の杜詩論のあり方をめぐる批判と肯定が明確に示され
ているのであり、それは彼の詩人・批評家としての美意識が表れたもの
といえよう。されば、黄庭堅はいう、

子美の詩の妙所は、無意をもって文をなす所にある。

（「大雅堂記」）

と。これは「無理に作る」（黄庭堅「詩文を作るを論ず」）ことへの反対
であり、「境地が生まれるのを待つて作る」（呂本中『童蒙詩訓』）こと
の主張である。あるいは、「流水、無意に鳴き、白雲、出でて無心」（黄
庭堅「李子先に寄す」）²⁸のような、芸術的境地をいう。

清の呉淳還はいう、²⁹

いわゆる「無意にして成る」とは、一種の差し迫った胸中のひらめ
きが、止めることができなくなり、肺腑から突き出てきたり、胸奥
で鐘が響き渡ったり、夢や病に驚き呻いたり、歌や慟哭となったり
するものごとときであり、どうして小さな見でもって拘泥できよ
うか。

（「重訂後山先生詩集序」）

つまり、句法・字法などに拘泥しているようでは、詩の生命力は失われ
てしまうというのだ。詩は、「無意にして成る」「境を待つて生まれる」
ことを貴ぶ。それは、いわば一種の天与の偶発的な芸術的インスピレ
ーションなのだ。「肺腑から突き出てきたり、胸奥で鐘が響き渡ったり」
というのは、インスピレーションが閃くと、詩情が湧き上がり、その瞬
間に生まれてくる大量の豊かなイメージやイマジネーションのことであ

る。また「境を待つて生まれる」とは、すなわち情感と境地、意味とイ
メージ、境地と境地等の間に突然出来る有機的関係を指す。この点
は、また中唐の皎然のいう「言葉と興趣が同一方向に赴き、情感の流れ
を素早い速さで追いかけて掬い取り、あくまで作為によらない」（『詩式』）
ということでもある。この「作為によらない」という主張に、黄庭堅の
「無意にして文を為す」の理論的淵源を見ることが出来る。江西詩派の
詩人たちは、杜詩中のこうした詩的構造や美的境地をはっきり認めたの
みならず、自らの創作実践を通してこの真髓を深く体得したのであつ
た。

宋・魏慶之『詩人玉屑』卷五に引く「小園解后録」には³⁰

朝来庭樹有鳴禽 朝来 庭樹に鳴禽有り

紅緑扶春上遠林 紅緑 春を扶けて 遠林に上る

忽有好詩生眼底 忽ち 好詩の眼底に生ずる有り

安排句法已難尋 安排 句法 已に尋ね難し

これは陳与義の詩だが、詩末の二句を見れば、詩の詩たる所以が、
作為にはないことが分かる。

とある。また宋・葉寘『愛日齋叢鈔』卷二には³¹

陳与義は、

忽有好詩生眼底 忽ち 好詩の 眼底に生ずる有り

安排句法已難尋 安排 句法 已に尋ね難し

といい、呂本中は、

忽見雲天有新語 忽ち見る 雲天に 新語有るを

不知風雨對殘書 知らず 風雨のうちに 殘書に對すを

と述べた。静寂の中に心を置き、真に己の見聞したものと少しの隔たりもなくしてこそ、初めてこうした妙句が得られるのだ。

という。

詩の詩たる所以は、その意匠にあるのではなく、「己の見聞したものと少しの隔たりもない」ことが、肝要なのだ。すなわち、主観的真情と客観的景物との融合、景物の感応と感性の外在との完全統一こそが、重要だというのである。しかし、いかなる時、いかなる景物でも、こうした条件を具備するわけではないから、必ず「境地を待つて生」まねばならない。詩人の任務は、情と境の完全に統一する最良の時を、タイミングよく捉え、また芸術的インスピレーションの発動に従って、自然に「忽ち 好詩の 眼底に生ずる有り」のような詩を得ることにある。もしこのような芸術的修養がなく、あるいはうまく芸術的インスピレーションの生まれる最良の瞬間を掴まえられなければ、たとえ「句法の安排」に精通していても、この妙境を形象化するのには難しい。

右の観点は、江西詩派の評論と創作論を貫くのみならず、江西詩派詩人一般に見られる美意識なのだ。たとえば呂本中の「曾吉甫^⑤に与うる論詩帖」には、

張長史（旭）は公孫大娘の劍舞を見て、にわかには筆法を悟ったという。張旭は、平生より書藝術に意を凝らし、胸中より忘れたことはなかった。だからこそ、こういう場面に出くわして、自得する所があったのだ。もしこれが他の人間だったら、たとえ劍舞を見せたところで、何か感ずることがあつたらうか。

（胡仔『茗溪漁隱叢話』前集 卷49）

と記される。

一般的にいつて、書法と劍舞とは全く関係はない。しかし、書法の芸

術修養を積み重ねた草聖張旭は、ひとたび「燿として羿の九日を射て落とすが如く、矯として群帝の龍に驂^{さん}して翔くるが如し」「瀏漓・頓挫、独り出でて時に冠たり」（「公孫大娘の弟子が劍器を舞わすを觀る行」『杜詩詳注』卷20）といわれる、公孫大娘の劍舞を見るや、深い芸術的インスピレーションが閃光のように湧き起こったばかりか、豊かな芸術的連想がこの一事より様々に広がり、いわば劍舞から「筆法を頓悟」し、草書を「神妙」の境地にまで至らしめたのである。こうした普遍的美意識こそが、江西詩派の杜詩藝術に対する深い解釈をもたらしているといえよう。

杜甫は、一人の詩人としてその生涯を詩歌芸術の探求に捧げ、晩年の作品などは一層の成熟を遂げて、一切の模倣を脱した名人の至境に到達している。詩人自ら「晩節、漸く詩律において細やかなり」（「遺悶 戲呈路十九曹長」卷18）というのも、「文章、千古の事、得失、寸心知る」（「偶題」卷18）といった文学の全てを知りつくした発言なのだ。清の黃子雲の『野鴻詩的』には^⑥

杜甫の早年の作品は、欠点も少なくない。…（しかし、）入蜀以後はまさに聖域に至った。

といわれるが、頗る卓見である。しかし、この杜甫晩年の詩歌の芸術的成果については、唐宋期には、一般的には軽視され顧みられなかったのである。

例えば、白居易が称賛する杜甫の詩といえば、ただ「新安吏」へ石壕吏」へ潼関吏」へ蘆子^{ろし}を塞^まる」へ花門に留まる」などの章や、「朱門には酒肉の腐れるに、路には凍死の骨有り」の詩句（「元九に与える書」）のみの、いわば儒家の詩教的精神を反映した「風雅比興」の、初期の限られた作品ばかりである。また宋の司馬光も、「国破れて山河在り、城春にして草木深し。時に感ずては花も泪を濺ぎ、別れを恨みては鳥も心を驚かす。」

〔「春望」〕の句について、「最も詩人の体を得たもの」(『司馬温公詩話』)と述べる。さらに孔武仲は、「江頭の宮殿は千門を鎖し、細柳の新蒲は誰が為にか緑なる」〔「哀江頭」〕の詩句を、「善を褒め悪を責め、君を尊び臣を卑しめ、彫琢を施さず、奥深い部分で經典とも合致し、思うに騷人のともがらにして、風雅を継ぐものといえよう。」(『宗伯集』 卷16 「杜子美の〈哀江頭〉の後に書す」という。みな、儒家の政教観より発し、杜甫の晩年の芸術上の至境には、一顧だにしないのだ。

杜甫の晩期の芸術的成就を、最初に肯定したのは、江西詩派の詩人たちであった。彼らは、杜詩芸術の美を発見したのみならず、杜詩研究史に対する一大貢献をなした。黄庭堅の「王観復に与える書」では、^⑧

杜甫の夔州以後の詩、韓愈の潮州より朝廷へ帰って以後の文章を見るに、みな規範に煩わされず、それでいて自ら合している。

と認めている。かくして黄庭堅は、「杜甫の東西川及び夔州の詩」を悉く書き、一ほとんどが晩期の作品だったが、それを楊素翁なる人物に請うて、石に刻んでもらい、「堂を建て〈大雅〉と名付けた」(「杜子美の巴蜀詩を刻むの序」)のである。これは、杜甫の晩期の詩歌に対する極めて高い尊崇だといえる。

この黄庭堅の視点は、方回によってさらに一步進められた。その「程斗山吟稿序」中には、具体的に杜甫の夔州前後の作品を比較し、杜甫54歳以前の作を、人工の美を極めたものであり、「綉の如くまた画の如し」と認めたのに対し、54歳以後の作を、「綉と画の意匠の跡が全く消え、頓挫悲壯でないものはなく、浮薄さを完全に脱落した」と述べる。黄庭堅と方回とは、江西詩派の首と尾ともいうべき重要な人物だが、その論点は實際上、江西詩派に共通する主張をなす。たとえば、黄庭堅のいう「規範に煩わされず、それでいて自ら合している」という見方と、方回のいう「浮薄さを完全に脱落し」「綉と画の意匠の跡が全く消え」てい

るとの見方は、まさに「無為をもって文となす」説が掲げる芸術的な最高の境地と完全に符合するのである。

ところで、詩歌の本質や特徴についての認識と同様に、杜甫の晩期の詩歌の評価についても、江西詩派と宋代道学とは、鋭い対立をなす。朱熹はいう、^⑨

人々は、多く杜甫の夔州以後の詩を好むというが、これは分かっていないのだ。夔州の詩は、かえってくだくだしく、それ以前の詩には及ばない。

また黄庭堅の主張への追隨に対しても批判を加え、

黄庭堅は一時自分の所見があったのだが、今日の人は、ただ黄庭堅が好しとするのを間に受けて、そういつているに過ぎぬ。まるで背の低い人が後ろから芝居を見て、前の人につられて拍手するようなものだ。

(同右)

と、明確に杜甫の「初期の甚だ精細」にして「以前の詩のよろしく」、また「晩年の詩のすべてがダメで」「文字も筆に任せて、でたらめになっている」(『同』卷一四〇)ことを指摘する。

このような杜甫の晩期の詩歌に対する全面否定のポイントは、それがいわゆる詩教の「道理」を逸脱している点にある。江西詩派の詩人らは、「詩は日々に進み、道は日々遠し」ということを掲げたが、これはまさに杜甫の晩期の詩歌に対する評価上、根源的な対立を示すものなのだ。朱熹は、杜甫晩期の詩歌を高く評価することに極めて不満を表明するが、同時にそれを学ぶ江西詩派の詩人らも強く叱責する。いわく、^⑩

呂本中は詩を論じて、字々響きあわんことを求めたが、晩年の詩はダメなのが多い。

これについて、紀昀は客観的な判定を下す。

〔『朱子語類』 卷一四〇〕

朱熹は、詩をもつていわば余事とする。呂本中は、詩をもつていわば専門とする。したがって一篇の吟詠にも、自ずから深淺の差異が出てくるというものだ。朱熹の説を必ずしも定論とする必要はない。

(『四庫全書繪目提要』卷一五八)

朱熹の論は、いわば道学者の詩論の淺さを露呈したものと見えよう。されば、呂本中を評して「晩年の詩はダメなのが多い」というのと、杜甫を評して「晩年の詩のすべてがダメだ」というのとは、全く同一のこととなる。それは、かえって江西詩派が杜詩晩期の詩歌的価値を発見したのみならず、またそれを最高の典範として懸命に学び究め、江西詩派の独特の詩風の形成を促進したことをも逆証明するものである。

第一章 記注

①『宋史』卷三五六に伝あり。寬夫は字、名は居厚。熙寧の御史を務めた延禧の子。進士及第、のち戸部侍郎となる。彼の詩話は宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』中に、断片的な形で収録されているが、それに十二条を補い編集したのが、郭紹虞輯『蔡寬夫詩話』である。したがって、本書のまとまったものとしては、郭紹虞輯『宋詩話輯佚』(中華書局 80)を参照。ここに引くのは、その43「宋初詩風」中の文章で、北宋期人々の関心が白楽天(白体)や李商隱(崑体)・晚唐体を経て、最も晚く杜子美が出たが、まもなく最も尊敬されるようになったことを指摘する。なお、許綏氏の他の論文「宋詩宗杜新論」中にも、『蔡寬夫詩話』の杜詩評についての言及があるのを参照されたい。

②方回(一一二七—一三〇七)、号は虚谷。これは『瀛奎律髓』卷26「變体類」中の陳与義の七律「清明」詩に付された方回評であり、江西詩派の詩字を端的に示したものとして重要である。この陳与義は、嚴羽

の『滄浪詩話』では「亦た江西の派なるも、す小しく異なる」(「詩体」の陳簡齋体の条)と述べられるのを、方回が「三宗」の一人に連ねたものである。その背景には、江西詩社の壮大な規模を後世に示す意図があった。江西詩派の名簿は、北宋後期の呂本中の「江西詩社宗派図」に計二五名記されるが、北宋末南宋初の代表的詩人陳与義は含まれていない。そこで方回がのちに補充し、改めてその中から黃庭堅・陳師道・陳与義を選んで「三宗」としたのである。

なお、これに関しては、許綏氏の他の著書『宋詩史』(重慶出版社 92)第4編第12章「呂本中与曾幾(兼及方回)」、また別論文に「金元杜詩学探析」(『杜詩学発微』南京出版社 89)、及び「論『瀛奎律髓』与江西詩派」(『學術月刊』82—6)があるのを参照されたい。また李慶甲校点『瀛奎律髓彙評』(上海古籍出版社 83)の「前言」、及び莫砺鋒『江西詩派研究』(齊魯書社 86)第6章「南宋的其他江西派詩人—方回」等が有益である。

③明・胡應麟『詩藪』内篇卷三「古体」下「七言」中の文章。この巻は「七言歌行」の歴史的展開について述べる。まず前半で形式による頂点を杜甫・李白だと認めた後に、この詩形式における後世の展開を略述する。本文に引くこの胡発言は、後者の部分で述べられており、今、その全体を訳出すれば、

宋の黃庭堅・陳師道は、杜詩学の最初の提唱者である。しかし、黃庭堅の律詩は、徒に杜甫の声律の中の偏なるものを学びとり、結局その表現は杜甫とは似ていない。晦澁で豊かさに乏しく、銳意新奇さを出そうとしているが成功していない。いふなれば小乗禪といったところである。が、彼は一代にわたり杜詩を尊んで、無上なるものとした。一方、陳師道の五律は、杜詩の骨を得た面もあり、宋代の作品の中では絶品といえるが、やはり皆杜詩から遠く離れたもの

ばかりである。

とある。即ち胡応麟は、黄・陳が杜詩学史上その最初の提唱者だった点を明言するが、成果としては必ずしもその発展者ではないことも指摘する。

④ここで錢謙益は、宋以後の杜詩理解のあり方について批判し、なかでも黄庭堅と劉辰翁（一二三四―一二九七）の二人を取り上げ、「一知半解」の徒と酷評する。錢はいう、

宋人の（杜詩論の）中心は黄庭堅、元人及び近時では劉辰翁だが、彼らとともに杜詩を奉じて律令とした。そのことにあえて異論はないが、私はかつてこれについて、宋以来、杜詩を学んだ者の中で黄庭堅ほどよく学ばなかった者はなく、杜詩評者の中で劉辰翁ほどよく批評できなかった者はない、と述べた事がある。

と。そしてこの後に、本文の引用が続く。なお、本文の部分の後の文章は、次のようになっている。

明の弘治・正徳年間（すなわち明の前七子の時代）の杜詩の信奉者（例えば李夢陽など）は、杜詩を鵜呑みにするばかりで、細々としたことまで引つ張つてきては、財産のようにありがたがった。これはまるで黄庭堅の瘧りが再発したようなものであり、それに気付いた賢明な者の中には、この江西詩派に口をとがらせる者もあった。したがって彼の『錢注杜詩』は、こうした黄庭堅・江西詩派、及び劉辰翁の杜詩解釈に対して、「深く慨有り」てなされたものとなっている。

⑤この文は、『昭昧詹言』巻八の第四項からの抜粋。今、本文中の中略部分を訳出すると、

ただそれならば、それは錢謙益も同じことで、彼もよく知っているとはいいがたい。李夢陽が、何でもかんでも杜詩を鵜呑みにしたの

に比べれば、黄庭堅が杜詩にいかによく学んだかが分かるのだが、

錢謙益はこの点を十分には理解していない。黄庭堅が杜甫より得たのは、実際にはもっぱらその苦澁・悲傷的な面や、律詩の厳格さなどの点である。これのみで杜詩の全体に代えてしまったために、彼の詩の意図は浮つき功浅く、結局、皮のみ伝えて真意なし、という有り様になってしまふのである。したがって、巨大な刀で天を摩り、天地をどよますなどということは、黄庭堅にはついぞできなかった。しかし、このことはだからといって、彼の杜詩理解の皮相さを認めるといふ訳ではない。私の考えでは、黄庭堅は杜詩の真髓を知らなかった訳ではなく、人間には各々性格や学問・力量などがあり、また先人の通りには必ずしも行いたくないし遠慮などもあって、かえって大事なものを後回しにしてしまっただけだと思われる。そうであれば李夢陽のように、杜詩の真髓を得たかのような顔をしている者に比べて、どうして遅れをとることがあるのか。

と、記される。江西詩派を擁護する立場からの発言である。

⑥これについて、例えば周裕鍇「黄庭堅近況総述」（『語文導報』86―4 杭州大学）は、(1)黄庭堅の詩歌理論について―否定的・肯定的評価の紹介、(2)その詩歌創作について―思想内容・芸術的特色の評価に関するもの、(3)その詞について―中国詞史上の位置、艷詞と恋愛表現等、(4)その哲学思想と美学思想、の4章に分ち総括する。また、周氏によれば、建国以来85年10月までに発表された黄庭堅論は70篇ほどあり、同年11月には黄庭堅生誕九四〇周年學術討論会が開催されている。

さらに陳書録・胡腊英「建国以来関于黄庭堅的詩歌理論和詩歌创作的討論」（『文史知識』87―4）も、同様の報告書で参考となる。

⑦中国社会科学院文学研究所編『中国文学史』（人民文学出版社、62）
⑧本論は、方回以前に江西詩派の詩論を説明した人々として、陳師道・

胡仔・王若虚などがいるが、ごく部分的なものに過ぎず、それを初めて体系的に解釈したのがこの方回だとして、その内容を具体的に説いたものである。

許総氏によれば、方回の詩論のポイントは、実作者としての豊かな経験を生かした評論にあるという。彼の創作論は平淡・自然にあったが、これを『瀛奎律髓』の選択基準として、「西崑体を排して、江西詩派を主とす」という立場を取る。が、方回は江西詩派の考えのすべてを踏襲した訳ではなく、平淡であるとともに、『豊腴』であることも求めた。その結果が、陶淵明重視に至ったことなどを論ずる。

⑨ エンゲルス、「カール・マルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリエメール一八日』」第三版への序文。なお邦訳に『マルクス・エンゲルス全集』21（大内兵衛監訳 大月出版社 71）があるが、許総氏の引く中国語版とやや表現が異なるため、ここでは許総氏の原典に即した。

⑩ 許総著『杜詩学発微』の「論宋学对杜詩的曲解和誤解」を参照。なお加藤に「宋学における杜詩論」訳注（『愛媛大学教育学部紀要』II-24-1 91）と改題した訳注がある。

⑪ 『豫章黄先生文集』巻8（『四部叢刊』正編）、及び『古典文学研究資料彙編 杜甫卷』上編第一冊（中華書局 64 以下、『彙編 杜甫卷』と略す）一二三頁

⑫ 杜甫に「壁上の韋偃が画ける馬に題する歌」（『杜詩詳注』巻9）があるのを踏まえた作品。『彙編 杜甫卷』上編第一冊 一二二頁所収

⑬ 『後山詩話』（清・何文煥『歴代詩話』上 三〇六頁 中華書局 81）。本文引用の前に、次のようにいう。「詩は好からんことを欲すれば、則ち好くすることができない。王安石は工、蘇軾は新、黄庭堅は奇が長所である。」これに続けて、本文の「杜甫の詩は工の対立概念たる易、

同様に新に対する陳、奇に対する常を兼備しているがゆえに、結果として良くないものがない」がくる。つまり、好い詩を作ろうとして、何か一つの価値観で臨むとうまくいかず、やはり「対立の統一」が重要であることをいおう。

なお周祖謙「後山詩話 作者考弁」（『廈門大學報』87-1）は、かねて一部で言われてきた、本書を陳師道に仮託した偽作との説を否定し、彼自身の作になることを論じたものである。

許総著『宋詩史』（前掲）第3篇第5章「清純沈健的陳師道」では、陳師道自身の発言として、しばしば引用されている。

⑭ 原文には、『尚書』『堯典』とあるが、これは『舜典』の誤り。また本文中に引く次の孔穎達の引用は、『礼記』『経解篇』第26の正義による。

⑮ 原文には『朱子語類』と引くが、『朱子文集』の誤り。この引用文は、「陳体仁に答う」中に見られる。陳体仁は陳知柔の字。泉州の出身で紹興12年の進士。生年は不明で、淳熙10か11年頃没。この陳体仁と朱子は、朱子が20代後半、泉州同安県主簿に任官して以来の知り合いである。陳体仁の伝は、『宋元学案補遺』巻44、『閩中理学淵源考』巻12に見られ、『詩声譜』等の著作がある。この「陳体仁に答う」は、おそらくこの『詩声譜』に関する彼の考えに対する、朱子の返事であろうとされる。以上、この項は、朱子学研究者の東北大学助教・市来津由彦氏に全面的にご教示を仰いだ。氏のご回答は詳細なものだったが、紙数の関係で要約して注記せざるを得なかった。謹んで謝意を表すとともに、ご寛恕を請う。

⑯ 『朱子語類』巻一三九（王星賢点校 中華書局 86）三三〇五頁。

なお、朱子の詩論に関する近年の研究としては、例えば、(1)林鴻榮・宋洪志「文学史応為朱熹詩留一席位」（『齐鲁学刊』87-1）、(2)謝謙

「朱熹文学批評的批評」（『許昌師專学报』88—2）、（3）蔡厚示「朱熹の詩和詩論」（『福建論壇』91—1）等がある。（2）謝論文では、朱熹及び理学者らの「文学の自由の否定」は「実際、文学と道德とが激突する、一種の歴史的現れである。：文学とは、人間精神の表現、カタルシスであり、不満と反抗、自由と解放の表れであり、人間の生活上の一種の方法なのだ。したがって、それは道德との間に、激的な衝突を避けられない。いわば、道德とは、一種の規範であり、対人的行為、生活スタイル、甚だしくは精神・意識・心理に対する規範なのだ。」等と論じられる。

ただし、江西詩派が、理学の全く対極面から生まれたものかという、必ずしもそうではない。これに関しては、例えば馬積高「江西詩派与理学」（『文学遺産』87—2）に論じられるのが、参考となる。

⑬呂本中（一〇八四—一一四五）、字は居仁。東萊先生と称される。壽州（今の安徽省壽県）出身。彼の事跡については、『宋史』卷三七六に本伝がある。経学と文学の双方に通じ、『東萊先生詩集』（日本内閣文庫蔵の影印版が、『四部叢刊統編』に収録される）がある。

若いときに「江西詩社宗派図」をなし（制作年は不明だが、莫砺鋒の推定によれば、19—20歳頃）、初めて「江西詩派」という名称を用いた。呂本中は、他の多くの江西詩派の詩人と比し、年齢的に若かったが、かなりの詩人らと交流を持った。本文中に登場する汪革・謝逸・饒節の三人とも、無論交流があった。

許綸著『宋詩史』（前掲）第4篇第2章「呂本中与曾幾（兼及方回）」や、莫砺鋒『江西詩派研究』（前掲）第六章「南宋的其他江西派詩人」一六三頁に詳しい。また、呂本中の詩歌創作論に関しては、沈暉「呂東萊与江西詩派」（『江淮論壇』90—2）が参考となる。

⑭この「王知載の〈胸山雜詠〉の後に書す」の一文は、元符元（一一〇九八）年、黃庭堅54歳、彼が戎州に貶されていた時に書かれたものである。この頃、蘇軾の方は、海南島の儋州に流されていた。

この文中で、黃庭堅は詩の縁情説を強調する一方で、詩によって「訕謗や怒罵」することに反対、後世現実逃避の詩論だとして、厳しい批判を浴びるものになった。しかし、莫砺鋒の研究によれば、従来の解釈は、この文章が書かれた背景を全く無視しているという。すなわち、これは、詩を作って「罵るのを好んだ」蘇軾が、激しい政治的抗争の中で文字の獄に遭い、海南島に流竄されたことを踏まえての発言であることを看過すべきではないとする（『江西詩派研究』第七章「江西詩派的詩歌理論」一九六頁）。

⑮この引用文は、彼が若いときの見聞を記したものである。莫砺鋒によれば、呂本中が饒節を呼ぶ場合、出家後はその法名である如璧をもとに、つねに「璧公」「壁上人」と称しているとする。とすれば、本文は饒節という俗名で記していることより見て、饒節の出家（崇寧二—一〇三年と推定される）以前の作、すなわち呂本中が二〇歳以前の見聞と考えられる。ここでも、呂本中が若い頃より、多くの江西詩派の詩人と交流を持っていたことが窺える。

⑯汪革（一〇七—一一一〇）、字は信民。臨川（今の江西省撫州）出身。江西詩宗派図中の一人。その事跡については、晁説之の「汪信民哀辞」（『崇山文集』卷20）に概述される。主著には「清溪集」があるが、亡佚。今は、『東萊呂紫微詩話』等の宋人の著作中に、佚詩五首が伝わるのみで、その全貌を窺い知るのには困難となっている。本詩は、そのうちの一首で、詩題は欠。本詩の詩風的特点としては、音節的にはやや拗体で、言葉も少し硬いが、黃庭堅ほど硬硬ではないとされる。なお汪革は、詩を寄せた相手の謝逸を初め、その弟謝邁と親密な交流

を結んだ。

- ⑲謝逸(一〇六四―一一一三)、江西詩宗派図中の一人。字は無逸、号は溪堂。臨川(前出)出身。弟の謝過とともに「二謝」と呼ばれた。ともに終身隱棲して仕えず、劉克莊が「その高節、亦た及ぶべからず」と、感嘆するほどだった(『後村先生大全集』卷95「江西詩流」条)、謝逸の側から汪革を素材に描いたものとしては、「汪信民を懷う」「汪信民の村居を懷う」(以上、古詩)「汪信民を送る序」等がある。

なお、謝逸は黃庭堅に会ったことはないが、黃庭堅の方は彼の詩を読み称賛して、「面識になれぬのを恨むばかりだ」と述べた(惠洪『冷齋夜話』卷七「謝無逸佳句」条)。彼の詩は、江西詩派中高く評価されたが、その主な内容は隱棲生活を描いたものである。黃庭堅の詩風に似て、「瘦硬」な面を持つが、大半は清新で軽やかだとされる。

本文中で、汪革は謝逸を「康楽」、すなわち謝靈運に擬えているが、呂本中は後にこれをさらに發展させ、謝逸の詩は「康楽に似たり」(『謝幼槃文集』巻首 呂本中序)と述べた。が、この発言の意味を劉克莊は疑問視する。(前掲 卷95「江西詩派」条)。この点について、莫砺鋒は、「おそらく呂本中は、謝靈運と同姓であることから、その詩を称えてこう述べたのであり、その詩風をもとにこういったわけではあるまい」(『江西詩派研究』一〇五頁)という主旨の解釈をする。

- ⑳饒節(一〇六五―一一二九)、江西詩宗派図中の一人。字は德操、臨川(前掲)出身、自ら倚松老人と号した。今、『倚松老人詩集』二卷(全三七四首)が伝わる。一一〇三年(38歳)頃、丞相曾布と新法をめぐり対立、去って落髮し僧(法名は如璧)となった。

- ㉑『溪堂詩』巻五(豫章叢書本所収)。また『彙編 杜甫卷』上編 第一冊の一六一頁に収録。

- ㉒ Theodor Lipps(一八五一―一九一四) Johannes Volkelt(一八

四八―一九三〇)。ともに「感情移入」論を提唱、双壁と称揚される。

- ㉓『豫章黃先生文集』第17(四部叢刊正編所収)。

㉔吳見思『杜詩論文』「凡例」は、「総論」「章法」「句法」「字法」「余論」の五項目からなる。そのうち「余論」は、さらに11則から構成される。引用文は、第六則にあたる。この「余論」は、彼の杜詩論のメモを付記したもので、典故・律詩の優秀さ・テキスト・杜詩解釈上の誤り等について、述べる。本文の発言は、その従来の杜詩解釈の誤りを指摘、正しい杜詩論をなさんとの意図を示したものである。

- ㉕『四庫全書珍本初集』所収。

- ㉖『黃庭堅別集』巻六。

㉗『董蒙詩訓』第35条「詩文は強いて作らず、応に先に大意を立てるべし」の項を参照。(郭紹虞輯『宋詩話輯佚』下 中華書局 80)。ここで呂本中は、黃庭堅の発言を引用し、「詩文は徒に強作せず、境地が生まれるのを待つて書くようにすれば、自ずから巧みになるものだ」と記す。

- ㉘『黃山谷詩集 外集』巻5、「以同心之言其臭如蘭為韻、寄李之先」詩(元豐2年 在北京)。

㉙『陳後山詩集』巻首に引かれる。また『古典文学研究資料彙編 黃庭堅和江西詩派卷』(傅璇琮編 中華書局 78 以下、『彙編 江西詩派卷』と略す)下巻の九〇一頁にも収録。

㉚『詩式』「鄴中集」の項目に引かれる。原文は建安の七子に関する評論で、中でも陳思王曹植の詩を最高と認める。その一理由として、対偶表現を取り上げ、彼がいかに規範に拘泥せず、たとえ対偶を用いるときでも、以下本文にいうように、「言葉の興趣、文勢と情感とが一致し、作爲的にならない」かを指摘する。

なお、皎然のこの詩論は、実作者の立場で論を構想したものであ

り、禅心をもって深い境地を詩中に描くという、新しい表現上の可能性を追求したものと、中国詩史上大きな意味を持つ。関連文献としては、例えば程亞林「詩禅關係認識史上重要環節―讀皎然・齊己詩―」（『文学遺産』89―5）を参照。

③③ 原文には、『詩人玉屑』卷三とあるが、卷五の誤りだろう。これは、卷五「初学蹊径」の一節「不可作為」と題する文である。ちなみに、『彙編 江西詩派卷』下卷八一六頁にも卷三とあるが、誤植である。「小園解后録」は闕名。

③④ 『彙編 江西詩派卷』下卷 八一八頁に収録。

③⑤ 曾吉甫は、曾幾（一〇八四―一一六六）の字。贛州（今の江西省贛県）出身。その事跡は、陸游「曾文清公墓志銘」や『宋史』卷三三二本伝に見える。曾幾は呂本中と同年生まれだが、詩名は呂本中のほうが早く聞こえ、そこで曾幾は彼に詩法を問うたことがある。本文に掲げる資料も、そうした交友の過程で生まれた文章である。呂本中は「活法」を最初に提唱、創作中における活発流動な詩風を主張。曾幾はその影響を強く受け、呂本中よりも高い成果を上げ、江西詩派の詩風を変える重要な役割を果たした。その作風は、後の陸游・楊万里に受け継がれていく。

許総著『宋詩史』「呂本中与曾幾」、莫砺鋒『江西詩派研究』第六章を参照。なお、原文は、何汶『竹莊詩話』卷一講論（常振国等点校 中華書局 81）、『彙編 江西詩派卷』下卷九六二頁にも引かれる。

③⑥ 王夫之等撰『清詩話』下冊（上海古籍出版社 63）所収。『野鴻詩話』第24条からの節録。

③⑦ 『司馬溫公詩話』（『百川学海』本戊集）、『彙編 杜甫卷』第一冊78頁にも引く。

③⑧ 『彙編 杜甫卷』上編第一冊一一四―一一五頁。

③⑨ 『豫章黃先生文集』卷19。

④⑩ 方回『程斗山吟稿』序。未見。

④⑪ 前掲注⑩を参照。

④② 原文は、『四庫全書總目提要』卷一五八から引用するが、朱子の直接の文献より引く。

④③ 『彙編 江西詩派卷』下卷七八七頁。なお、紀昀の宋詩に関する見解は、『四庫全書總目提要』『紀文達公遺集』『刪正方虛谷瀛奎律髓』等の著作中に見られる。紀昀は、文学を評価するのに、道学をもって論ずることに強い不満を示した。そして宋詩の黄金時代を、蘇軾と黄庭堅を代表とする元祐年間の詩人たち、及び「江西詩派」の作と認め、紀昀自身、江西詩派に学び「生新」さを出す手法を重視した。また紀昀は、江西詩派を（一）黄庭堅・陳師道、（二）呂本中・曾幾、（三）陳与義・陸游の三段階に分けて捉えた。これに関する近年の論文としては、関道雄「紀昀的宋詩優劣説―兼及他的論詩主張―」（『文学遺産増刊』17 中華書局 91）が参考になる。

〔後記〕

ここに取り上げたのは、許総氏の主要論文の一つ「江西詩派杜詩学探微」（初出『中国古典文学論叢』89―7、後『杜詩学発微』に所収）である。この江西詩派の杜詩論については、中国詩史上きわめて重要な位置にありながら、資料文献の整備の遅れなどが致命的な要因となり、従来ほとんどといってよいほど研究されていなかったものである。それだけに許総氏の分析は、まことに新鮮で興味深い。

この許論文の数年前に、莫砺鋒『江西詩派研究』（齊魯書社 86）が刊行され、江西詩派に関する最初の体系的専著として、江西詩派の人物論・詩歌芸術・詩歌理論・後世への影響・歴史的評価等を総合的に捉え、

斯界の注目を集めた。が、江西詩派の杜詩論に関する限りは、莫氏の分析は十分なものとは言いがたかった。許論文は、この部分を集中的に補完するとともに、自己の杜詩学を体系的に構築せんとすの意図の下に、執筆されているようだ。

本論には、許総氏らしい鋭い分析が随所に見られ、多くの興味深い指摘がなされている。まず、この第一章では、道徳的詩教観の強い当時の価値観の中で、江西詩派が杜詩の縁情的芸術性を発見し、また詩派の各詩人がそれぞれの作にその美学を實踐し、さらには詩論としてその立場を主張していった様子を、じつに様々な文献を駆使して、具体的に論じている。許総氏の立論は、基本的に宋学を政教的思想と位置付け、その対極点にこの江西詩派の美学的見解が生まれてきたとするものである。

大略的にはこれで解釈できると思われるが、さらに歩を進めていくと、その江西詩派の詩人自身（例えば、呂本中）が、重要な理学者でもあるというケースがあり、こうした人物の中の理学的詩論と反理学的詩論との境界の解明は、まだ今後の課題として残されている。馬積高氏のような、江西詩派と理学者の詩論は根本的に共通するという議論も（注⑩参照）、まさにこの方面の研究がまだ緒に就いたばかりであることを物語ろう。

ここに用いたテキストは、『杜詩学発微』（前掲）所収の論文である。許総氏の文章は、古典の典故を随所にちりばめており、また引用範囲もすこぶる広い。注者に分からない点も少なからずあり、例によって著者自身に問い合わせ、その回答に基づいて訳注を進めた。資料など、地方に住む者には、どうしても未見のものもあったが、いつか機会があれば確認したい。本文中の（ ）は、許総氏の注記にもとづくことを、〔 〕は、訳注者の補ったものであることを示す。また、関連する訳注には、必要に応じて近年の研究動向も掲げておいたが、もとより完全なものではない。

大方のご示教を頂ければ幸いである。

（一九九二年一〇月二二日受理）

（続く）